

書 評

岡野英之. 『アフリカの内戦と武装勢力 シエラレオネにみる人脈ネットワークの生成と変容』昭和堂, 2015年, xvi+427 p.

深川宏樹*

本書は、シエラレオネの内戦における政府系勢力の形成から解体に至る過程を、「人脈ネットワークの生成と変容」という観点から記述し、考察したものである。ここでの人脈ネットワークとは、パトロン・クライアント関係の縦のつながりを中心に、多様な人と人の結びつきまで含めた語である。内戦下での人脈ネットワークの生成、統合、再編を追うことで、カマジョーと呼ばれた自警組織が政府系勢力 (Civil Defense Force, 以下CDF) に変容する過程を明らかにすることが、本書の主な目的である。以下が本書の構成である。

- 序論 シエラレオネ内戦を学際的に考察する
- 第1章 シエラレオネ内戦とカマジョー／CDFの概要
- 第2章 仮説の構築と分析枠組みの設定
- 第3章 調査・研究の手法
- 第4章 歴史的背景
- 第5章 内戦勃発とカマジョー形成以前の展開
- 第6章 小さなネットワークの誕生
- 第7章 統合を重ねるPCネットワーク

- 第8章 優位なPCネットワークの台頭 (ジェンデマ・カマジョー)
- 第9章 入れ替わった優位なPCネットワーク
- 第10章 政府系勢力CDFというPCネットワークの確立と解体
- 第11章 内戦を生きる人々
- 終章 人脈ネットワークとしての武装勢力

以下では本書の議論の大枠を紹介したい。まず、序論では本研究の位置づけが述べられる。西アフリカに位置するシエラレオネは、反政府組織 Revolutionary United Front (RUF) の蜂起に始まる11年間 (1991~2002年) にわたる長期の内戦を経験した。本書の対象は、その過程で形成された政府系勢力「カマジョー／CDF」である。これまで、シエラレオネ内戦の先行研究は、反政府組織RUFに焦点を当ててきたが、本書はRUFの対抗勢力にして、後に戦闘員数3万7,000人程の国内最大の武装勢力となるカマジョー／CDFを主な対象としている。また、本書は政治科学におけるアフリカ紛争研究が提示してきた一般的な説明モデルを、シエラレオネ内戦の事例から批判的に検討し、新たな知見を加えている。さらに、人類学の古典的な民族誌が特定の民族や集団を研究対象として設定し、それらを固定的かつ実体的に捉えてきたのに対して、本書は、よりオープンに紛争下の「人脈ネットワーク」を対象に据えている。具体的には、カマジョー／CDFを人脈ネットワークとして、あるいは広範な人脈ネットワークから生成する「集団」として捉えてい

* 京都大学大学院人間・環境学研究科

る。内戦下においては、国家間の関係から地域社会のレベルまで、アクター間の関係が縦横無尽に切り結ばれるなかで、武装勢力が生成し、変容する。この複雑な状況を記述するには、交錯するアクター間のつながりの連鎖（と切断）を追いかける「人脈の民族誌」（p. 9）が求められる。総じて、本書は人類学と政治科学を架橋する、学際的な研究である。

第2章の理論と方法論に先立って、第1章ではカマジョー／CDFの概要が述べられる。カマジョーとは内戦時、メンデ・ランド各地のチーフダムで、メンデ人が自らのコミュニティを守るために自発的に創りあげた自警組織である。より正確には、本書でいうカマジョーとは、そうした自警組織のなかでも内戦時に創出された「カマジョー結社」の加入儀礼を受けて、結社の成員となった者たちを指す。それに対して著者は、結社に未加入の自警団員を「狩人民兵」と表現する（自警組織のリーダーシップを担ったのは伝統的狩人であった）。それらカマジョーがシエラレオネ政府の主導のもとで組織され、統合されたのが、政府系勢力CDF（Civil Defense Force）である。CDFは成員権が明確なリジッドな組織ではない。むしろ、「生活の面倒まで見てくれるパトロンに対してクライアントが忠誠を誓うタテの人間関係の集合体」（p. 49）である。

これらの基本事項を確認したうえで、第2章で本書の理論的前提と仮説、ならびに分析枠組みが提示される。まず、著者はアフリカ国家論、なかでも新家産制国家に関する議論とパトロン・クライアント論を参照する。パ

トロン・クライアントの概念を援用すれば、新家産制国家においては、あるパトロンがより高次のパトロンに対するクライアントとなり、クライアントはより低次のクライアントのパトロンとなりうるため、「パトロン＝クライアント関係は重層的に連鎖することで、タテの人脈ネットワークを構築しており、それが国家の支配を維持している」（p. 63）といえる。著者はこの重層的ネットワークを「パトロン＝クライアント・ネットワーク」と呼ぶ（以下、本書同様PCネットワークと表記）。

しかしながら、新家産制国家論とPCネットワーク論を接合した従来の紛争研究には、2つの問題点があった。それはPCネットワークの特権化と固定化である。つまり、PCネットワークのみに紛争生起の説明力を与え、かつ、ネットワークを変化なき固体のように捉えたうえで、その対立や分裂、弱体化などを論じてきたのだ。それに対して、本書はまずPCネットワークという本質的には縦の関係を、親族や友人の関係、商売上の関係、エリート層の結びつきなど、無数の横断的な「リゾーム状の人脈ネットワーク」（p. 70）との関わりにおいて把握する必要性を説く。さらに本書はPCネットワークを、絶えず変容し続け、ときに伏流し姿を隠しさえする流動体と捉える。PCネットワーク内の「資源」の配置・配分は常に変動し、それに応じてPCネットワーク内外の境界も変化しうる（本書では軍事物資・生活物資・資金・地位・雇用などを広く「資源」と捉えている（p. 62, 76））。一方、PCネットワーク内のアクターは相互に（PC関係の）役割行

為によって結びついており、各々が資源を追求するなかでパトロン（あるいはクライアント）を選び変え、自らの位置や地位を移行させる。そのなかで優位な位置にたつパトロンとは、資源の操作を通じてクライアントを動員することに成功する者だ。

これらを踏まえたうえで、本書で提示される仮説とは「各地で形成されたカマジョーが政府系勢力CDFへと統合されていくプロセスは、複数のPCネットワークが大きなPCネットワークへと収斂していくプロセス」(p.72)であり、「PCネットワークが組み上げられる時に機能したのが、リゾーム状のネットワークだ」(p.74)というものだ。それゆえ、上記で評者はカマジョー／CDFを「集団」と表記したが、正確には、広範な人脉ネットワークから生成する、強力なパトロンを擁いたPCネットワークと表現することができる。

この仮説を検証するために、本書はふたつのレベルで対象を記述していく。第一に、CDF全体のPCネットワークのレベル、第二にCDF内のひとつの部隊にみられるPCネットワークのレベルである。第一のレベルでは、内戦後のシエラレオネ特別裁判所に訴追されたCDFのリーダーと幹部を頂点としたPCネットワークを考察することで、武装勢力の生成と変容の全体像が解明される。第二のレベルでは、よりミクロな次元で、ひとつの部隊（CDF特別部隊）の個別のパトロンとクライアントの役割行為や、地位上昇の要因、自己のパトロンとなる者を選択する基準などが明らかにされる。

以上で、シエラレオネ内戦のカマジョー／

CDFの変遷を記述し考察する道具立てと、記述・分析の区別が出揃ったことになる。続く第3章で、本書のもととなった調査と記述方法が説明され、第4章では背景情報が与えられる。そして第5章から具体的な記述に入る。第5章から第10章では、カマジョー／CDF全体の変容が時系列に沿って記述される（第一のレベル）。各地のチーフダムで狩人民兵が組織され、その過程でカマジョー結社が創出され、チーフダムを越えた連携が確立していく。そのなかで、CDFのリーダーとなるノーマンを頂点のパトロンとして、優位なカマジョーのPCネットワークが台頭し、それを基盤に政府系勢力CDFが組織化されることになる。これと並行して第8章から第10章では、CDF特別部隊のPCネットワークの成立と変遷が記述される（第二のレベル）。最後に第11章では、CDF特別部隊に属した男性3人のライフヒストリーを通して、個々の「戦闘員が部隊を渡り歩き」、「PCネットワークは流動性を保ちながら、統合されていった」(p.361)ありようが描かれる。

個別具体的なデータの提示とその検討が幾層にも積み重ねられたのちに、終章では仮説の検証と、そこから得られた知見の一般化がなされる。なかでも興味深いのは、政治科学のアフリカ紛争研究に対する本書の貢献である。従来の説明モデルでは、紛争以前から力をもっていた政治的エリートのもとで、既存のPCネットワークが再編されつつ、クライアントが武装化されることによって、武装勢力がいわば上から形成されると考えられてい

た。それに対して本書では逆に、下から「PCネットワークが内戦の中で組み上げられ、特定の人物が武装勢力のリーダーとして、のしあがっていくプロセスを描いている」(p. 370)。その際に見逃すことができないのが、人脈ネットワークはシエラレオネ国外にも広がるため、「国境を超えたPCネットワークは隣国の武装勢力がつくられる際に、役立っている」(p. 371)と著者が論ずる点である。本書の具体的な記述では、カマジョー／CDFにおいて高位に登りつめる者たちが、しばしば国外(Economic Community of West African State Monitoring Groupや隣国リベリアなど)から資源を得て分配したり、戦闘員を動員している。これは国内のPCネットワークの分析に終始していた従来の研究ではみえてこなかった点である。

以上が、本書の議論の大枠である。詳しくは紹介できないが、第5章から第10章の具体的な記述の質の高さには目を見張るものがある。政権が繰り返しては転覆され、複数のPCネットワークが優劣を反転させるなかでCDFが立ち現れ、最終的に武装解除と戦闘員の社会復帰を伴いながら解体してゆく過程は、安易な要約を許さない。しかし、著者は、並外れた手腕でその過程を丁寧に解きほぐし、的確にまとめ上げながら論を進めている。紛争下で身の安全を確保するために人脈を駆使せねばならず、いつ内部者(CDF内の権力闘争の相手集団や、同じ町や村に居住する者たち)に裏切られ殺害されるかが不確かな社会状況の記述は、文脈に厚く、緊張感に満ちており、必読の価値がある。また、

著者はいかに政治的パトロンが公的な制度をときに流用し、ときに制度化・組織化それ自体を阻むことで私的な目的を達成するかを、紛争の生起・展開・収束の個々の局面に応じて描き分けている。この点でも、本書は貴重な資料である。それらの記述に裏打ちされることで、本書の主張に確かな説得力が与えられていることを強調しておきたい。

本書の真価は、それが対象と真摯に向き合った結果としての学際的研究である点にある。対象がもつ問題を真に追求する者は、気づいたときには狭隘な学問の境界を乗り越えている。この点を踏まえたうえで最後に(あえて)評者の専門である文化人類学の観点から、本書の貢献を述べておく。1980年代以降、人類学の学的営為が再考され、その対象設定や記述方法、理論と民族誌の関係、比較の視点などについて数々の議論が積み上げられてきた。国家や多国籍企業、国際NGOといった「ビッグ・アクター」をブラックボックスとすることが批判され[e.g. Golub 2014]、紛争研究ではグローバルな文脈や村落を越えたより広い社会的・政治的状况を所与の地とせず、それ自体説明すべき図とする必要性が説かれている[e.g. Englund 2005]。著者のいうように、本書を民族誌として捉えた場合、そのような人類学の流れのなかに位置づけることができるだろう。

そのなかで本書の新しさは、それが紛争下の近代的エリート(あるいはエリートになる者)とその人脈についての民族誌的記述となっている点にある。¹⁾ エリート研究それ自体は、もはや人類学で目新しいものではな

い。だが、紛争下の近代的エリート研究に関しては、近年注目されながらも、管見の限り、未だ本格的な民族誌が出されていない状況にあった。そうした研究には当然、フィールドワーク上の困難と倫理的な課題がつきまとう。その点、前者に関しては、信頼に足る文書資料の活用と、中心的なアクターの人脈を辿って芋づる式に元上官や戦闘員からライフヒストリーを聞き取ってゆく調査方法が、かなりの程度有効であることを本書は示している。また後者に関して、現状で我々にできることは、著者のように自らの調査上・理論上の立ち位置を明確にし、かつ既に収束した紛争を対象とすること（pp. 380-383 参照）だけだろう。この点については、まだまだ議論を積み重ねていく必要がある。本書にはPC論や社会学的な交換論がもちうる（政治的・経済的利益をめぐる）合理的選択モデルの色彩を帯びた箇所が散見される点が、評者としては個人的には多少気になるところはある。しかし、そうした点を加味しても、本書が上記の点で斬新かつ良質な民族誌であることに何ら変わりはない。

言うまでもなく、以上はあくまで本書の一側面である。本書はエリート以外の人々についての記述も豊富に含み、その理論的射程の

- 1) 政治学と人類学ではエリートの語の意味合いが多少異なるかもしれない。ここでの「紛争下の近代的エリート」とは、主に政治家や上級軍人などを指す。内戦時の一大勢力にして政府系勢力CDFは国軍ではない。しかし、カバール政権下で国防副大臣や内務大臣を務め、CDFの「国家調整官」となったノーマンや、CDF特別部隊において意志決定を主導し、最終的にCDF最高レベルのパトロンとなったスパローは、人類学者であれば紛争下の近代的エリートの範疇に含めるだろう。

広さと厚い記述ゆえに如何様にも読み深められるものである。また、社会科学が一般的に踏むべき手続きについて非常に懇切な説明が付されている。それによって、議論の検証可能性が確保されているだけでなく、専門家だけではなく一般の読者にも開かれた書物となっている。

著者はまえがきで「5章以降にあたるその記述は、エキサイティングで読みものとしても楽しんでいただけると自負している」(p. i)と述べている。評者にとっては「その長い前置き」まで含めて、本書全体がエキサイティングなものであったが、本書評で言及することができたのはそのごく一部に過ぎない。アフリカ及びアジア・オセアニア地域の紛争と平和構築に関心がある方々はもちろんのこと、紛争を対象とする社会科学一般の方法論や、新家産制国家論やパトロン・クライアント論、あるいは内戦をたくましく生き抜いた人々のライフヒストリーに興味のある方など、多彩な関心をもつ方々に本書を是非、読んで頂きたい。

引用文献

- Englund, Harri. 2005. Conflicts in Context: Political Violence and Anthropological Puzzles. In Vigdis Broch-Due ed., *Violence and Belonging: The Quest for Identity in Post-Colonial Africa*. London and New York: Routledge, pp. 60-74.
- Golub, Alex. 2014. *Leviathans at the Gold Mine: Creating Indigenous and Corporate Actors in Papua New Guinea*. Durham and London: Duke University Press Books.